小児科卒後研修カリキュラム

小児の診療は問診のとり方からはじまって成人診療と異なる点が多い。研修により医師として"こども"に触れてもらうことが最大の目標である。

１．小児科における研修目標

小児医療を適切に行うために必要な基礎知識・技能・考え方を習得する。

(1) 小児の特性を学ぶ

小児は常に成長、発達過程にあり、小児診療を適切に行うために正常小児の成長、発達に関する知識が必要である。一般診療に加え新生児・乳幼児健診に参加する。

(2) 小児診療の特性を学ぶ

乳幼児は診察の協力が得られず、また、症状を訴えることができない。問診は家族から（主に母親）聴取することになり、充分な情報を得る医療面接態度が重要である。できる限り多くの問診聴取を経験する。また、患児の様子を観察することで、その全身状態を判断できるよう経験を蓄積する。

(3) 小児期の疾患の特性を学ぶ

同じ疾患であっても小児では年齢に応じた対処方法が必要である。このため、小児特有の疾患について研修するのみならず、病態生理を理解したうえで年齢に応じた治療計画を立てられることを目標とする。

２．小児科における行動目標

A. 経験すべき項目

(1) 患児・家族と良好な人間関係を確立する。このためには小児であることを配慮した接し方に加え親のニーズを把握することも必要である。社会背景として、患児が育つ家庭環境を推察することも重要である。すべての医療をインフォームドコンセントに基づいて行う。

(2) さまざまな年齢の小児の診察を実施し、所見を解釈し、カルテに記載する。
特に原始反射などの乳幼児の生理的所見を経験し、発達・成長障害を含めた異常所見を解釈できる。

(3) 年齢に応じた小児の臨床検査を指示し、その結果を解釈できる。

(4) 年齢・体重に応じた薬用量の決定に習熟する。

(5) 以下の基本的手技の適応を判断し、指導者のもとで実施できる。

① 気道確保
② 輸液ルート確保及び輸液計画
③ 皮下、筋肉注射
④ 採血
⑤ 腰椎穿刺

⑥ 胃洗浄
⑦ 吸入療法

(6) 予防医学、一般常識として以下について学ぶ。
① ミルク、離乳食について
② 予防接種
③ 乳幼児健診を含めた保健事業
④ 小児虐待

Ｂ．経験すべき症候・疾患

(1) 一般症候：発熱、脱水、嘔吐、けいれん、意識障害、チアノーゼ、喘鳴、血便、下痢、哺乳不良・元気がない

(2) 頻度の高い疾患および小児特有の疾患熱性けいれん、川崎病、血管性紫斑病、ウイルス性及び細菌性髄膜炎、ウイルス感染症（麻疹、水痘、突発性発疹、インフルエンザ、ロタウイルス、ＲＳウイルス)、細菌感染症（溶連菌感染症、細菌性腸炎)、気管支喘息、腸重積、アトピー性皮膚炎

(3) 救急医療：小児救急患者の大部分は１次救急患者の軽症例であるが、この中から重症例を見逃さないことが重要である。すべての医師は小児救急を理解し、重症度に従ってトリアージできることが社会的に全救急患者の症候に対して重症度を判断し、適切な救急処置法を行うことを目標とする。

８:30		昼食	17:00 夕方
月	朝会・病棟・外来	病棟・救急外来	症例カンファレンス
火	朝会・教授回診・外来	病棟・救急外来	
水	朝会・病棟・外来	病棟・救急外来	
木	朝会・病棟・外来	病棟・救急外来	
金	朝会・助教授回診・外来	病棟・救急外来	

外来
月（一般、腎、循環器、神経）
火（一般、神経、新生児、循環器、発達）
水（一般、腎、循環器、血液腫瘍、心身症）
木（一般、循環器、腎、染色体、神経）
金（一般、神経、血液腫瘍、循環器、新生児）
その他、指導医とともに週１回程度、夜間小児救急医療を経験する。